司法書士法人田子事務所
行政書士田子洋督事務所 代表
司法書士 行政書士

田子 洋督氏

目標はJR総武快速線の停車駅（千葉駅～錦糸町駅）に各一の拠点。売上規模、人員規模を拡大し、大型法人をめざします。

日本のプロフェッショナルシリーズ
第463回

日本の司法書士

東京都の東側に隣接する千葉県市川市。人口50万人弱、東京のベッドタウンで開業したのは、司法書士・行政書士の田子洋督氏だ。現在売上規模1億円、総勢23名の組織を「売上規模5億円、人員規模100名」にまで拡大するのが目標だと語る田子氏。その一方で「のんびりくつろげるカフェのような法律事務所」をめざして、専門用語や堅苦しい言葉を使わずに相続相談を受けている。田子氏はどのような思いから司法書士になり、拡大路線に入ったのか。田子氏が資格取得をめざした経緯からこの先の方向性についてまで、エピソードを交えながら語っていただいた。

学生時代は演劇に熱中

現在、司法書士として活躍する田子洋督氏は、大学に進学するとき、「何か変わったことをしたい」と考えていた。立教大学の新入生歓迎会では「変わったことがいい」という理由で演劇部と馬術サークルを、さらに「カッコいい」という理由で男子ラクロスを見学した。選んだのは演劇部と馬術サークルの掛け持ち。やってみた結果、大学生活のすべてをかけるほどのめり込んだのが演劇だった。

「演者をやりたい人は演じる。脚本を書きたい人は脚本を書く。他にも、カメラ、照明、音響…。それぞれやりたい人がやりたい役割を担っていく。他大学の演劇部や社会人劇団と共演したり、新宿駅前広場でゲリラ公演をしたり、浅草の花屋敷で公演したり。すごく楽しかったです。

小道具に必要だからと自宅の布団を勝手に持ち出して、公演を見に来た両親に『ちょっと、それうちの布団じゃない！』と怒られたこともありました（笑）。大学や外部の小さな劇場で公演するとき、必ず両親が見に来てくれたのはうれしかったですね」

演劇一色の学生時代だったが、まったく資格と無縁だったわけではない。田子氏の通う立教大学は受験指導校と提携して税理士試験の学内講座を開いていた。周囲の学生たちが受講する流れに乗って、田子氏もチャレンジしてみたのだ。

「経済学部に所属していたので、めざすなら税理士だと考えました。でも、財務諸表論の勉強から始めたのですが、数字を扱う試験は向かないなと感じて、すぐにやめました。演劇など他に楽しいこともたくさんあったので、結局、税理士受験はフェードアウトです」

演劇部には大学卒業後もそのまま演劇を続ける先輩がかなり多かった。彼らは何よりも演劇に熱中し、「夢は下北沢の本多劇場！」と掛け声勇ましく劇団を立ち上げる者もいた。そんな熱い思いに動かされ、田子氏も下北沢周辺の小さな劇場に出演していた。

演劇に没頭し過ぎた田子氏は、4年間では卒業できず、1年間の留年が確定。就職活動もまったくしていなかったので「この先どうしようか」と考えた。そのとき浮かんできたのが、「独立できる資格を取得して、いずれ独立したい」という思いだった。

「人の輪の中で協調していくことより、個性を活かして自分のやりたいことをやるほうが自分には合っている。また、やるなら数字を扱う資格よりも、興味のあった憲法などを扱う法律系資格のほうが向いていると思いました」

近くの受験指導校に出向き、窓口担当者に「独立できて、ひとりでも食べていける、何かいい法律系資格はありませんか」と聞くと、「司法試験か司法書士のどちらかでしょう。司法試験は受験資格を得るまでに時間がかかるので、司法書士はどうですか」と言われた。

「これだ！と思いました。だから私の運命を決めたのは、その窓口の方なんです（笑）。今でこそYouTubeで発信したり、TVCMを出したりしてネームバリューを上げている司法書士もいますが、15年前は正直に言って司法書士はそれほどメジャーな士業ではありませんでした。すすめられなかったら、自分では考えつかなかったと思います」

こうして司法書士をめざして、田子氏の挑戦がスタートした。

カフェで働く受験生

司法書士事務所でアルバイトをしながら勉強に励む受験生は多い。しかしそこは「変わったことがしたい」田子氏のこと。働きながらの受験も、普通の受験生とは少し違っていた。

「私はカフェが大好き。アルバイトをするなら、カフェしか考えられませんでした。他の受験生が事務所でアルバイトをする中、私はいろいろなカフェや喫茶店で働きながらの受験でしたね」

アルバイトだとしても司法書士の実務に携わっていれば、少なからず受験にプラスになることもあるはずだ。しかしそんなことは意に介さず、田子氏は25歳から受験を開始して4回目の試験で合格を果たした。

「3回落ちたときには親も心配して、『行政書士のほうが受かりやすいんじゃない？ 行政書士をめざしてみたら？』とアドバイスしてくれました。でも模擬試験の成績も確実に上がっていたし、2回目の試験ではA判定が出ていたのでいけると思ったんです。それなのに3回目も落ちてしまった。ただ、自信だけはあって、もうダメだという感覚はまったくありませんでした。あきらめず勉強を続けた結果、4回目で合格できました」

演劇に熱中して大学は1年間留年。その後司法書士をめざすも、3回失敗。それでも両親は、文句1つ言わなかったという。

「ほとんどの学生は大学3年から4年の1月頃には就職サイトに登録して就職活動するのに、私は何もせずに演劇に没頭していました。今、私には2歳半の子どもがいますが、もし自分の子どもがそんな様子なら、きっと何か一言いいたくなるはずです。でも、私の両親は我が子を信頼していたんでしょうね。今考えると本当にすごいなと思います。私を信じてくれたこと、陰から支えて見守ってくれていたこと、すべてに感謝です」

▲「独立できて、ひとりでも食べていける法律系の資格」として、田子氏は司法書士を選択した。